

歌とダンスと音楽と

板東 浩

ステージでは二人の男性ダンサーが踊っている。白のシャツに黒のズボン姿で、身体をくねらせ長い手足が印象的だ。ここに一人の女性が加わった。ひらひらとしたドレスを身に纏い、華麗に弾き始めたバイオリン。最初は、それぞれのペースでばらばらだったが、次第に音楽と舞踏が互いに歩み寄って、融合してきた……。

これは、先日、新国立劇場で行われたコンテンポラリーダンス「Close the door, open your mouth」の一場面である。振付は世界で注目を浴びている伊藤キム氏。舞台には伊藤本人、一流のダンサー、歌手、バイオリンやチェロなどの演奏者が共演した。

ダンサーは、バイオリンの波動に共鳴したかのように、衝動にかられて歌い始めたのである。驚いたことに、二人のダンサーはカウンターテナーだった。裏声を使って、澄み切った高い声で歌う。その発声法は正統なもので、専門的な指導を受けて訓練を続けていることがわかる。一流のダンサーであるとともに一流の歌手でもあったのだ。

清々しい声は私の心の琴線を振るわせ、心の中に様々な映像が蘇ってきた。透明感のある声で米良美一さんがテーマ曲を歌っていた映画「もののけ姫」。この映画がきっかけで、カウンターテナー歌手が世に認められたのだった。また、十八世紀に活躍したソプラノ歌手ファリネッリを主人公に描いた映画「カストラート」。兄に去勢（カストレーション）されたことで「神の声」を与えられ、兄が作曲した歌で名声を勝ち得たが、天才作曲家ヘンデルとの確執もあり、波乱に満ちた生涯を送ったのだった。

こんな思いに耽っていて、ハッと我にかえった。静まりかえった会場に、カウンターテナーの声が小さく響きます。一筋の光のようだ。これに、もう一人の声が加わり、バイオリンやピアノ、チェロなど弦楽四重奏がおり重なっていくハーモニーの世界。音楽が盛り上がり、舞踏も激しくなりクライマックスへ。調子に乗りすぎて、二人のダンサーは演奏している女性のバイオリニストの背中と足を支え、高々と頭の上に持ち上げてしまった。それでも、彼女は全く意に介さず、難曲を完璧に引き続けていたのである。

この舞台では、ダンサーは舞踏で、演奏家は音楽で、演出家はストーリーで互いにコミュニケーションを行っている。嬉しい、悲しい、腹が立つという基本的な気持ちだけでなく、気恥ずかしい、寂しい、ためらい、などの複雑な情感までも表現。それも、言葉ではなく、ちょっとした仕草やウィットを込めた音楽の編曲によって、観衆を癒し和ませてくれる。これらがとつても魅力的でお洒落に感じた。

以前、私は、米国でクラシックバレエの舞台を観たことがある。アメリカで生まれ育ったバレリーナは、マニユアルで覚えたような手足の動きだった。一方、韓国出身のキムというプリマドンナの踊りからは、恥じらいやはにかみなど、東洋の文化圏で育まれて体得された細やかな情感が伝わってきた。また、インドネシアのダンスのように、ちょっとした眼差しや手指の先のほんのわずかな動きの中にも、ほのかな色気が漂っていたのである。

近年、日本の新しいダンスには、大きな展開が見られる。フランスでは一九六〇年代に、近代思想を中心とするあらゆる既成概念や芸術意識が見直される芸術革命があり、ここからヌーヴェルダンスが誕生した。その後、七〇年代後半から急激な社会風俗の変化に対応した若者文化が開花した。

一九八六年には勅使河原三郎が国際コンクールで入賞し、現代日本のコンテンポラリーダンスの活躍へとつながってきている。今や、世界はグローバルスタンダードの時代。今後、諸外国の言葉、文化、習慣、芸術、芸能に触れて感性を磨けば、日本人の舞踏家は、さらに世界の舞台で羽ばたくことになるだろう。